神奈川県内大学図書館
相互協力協議会

会報

平成24(2012)年3月1日　第47号
編集・発行　神奈川県内大学図書館
相互協力協議会
平成23年度事務局　〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-6
横浜国立大学附属図書館
電話 045（339）3203
http://www.kulc.net/
e-mail : kulc-office@kulc.net
印刷　共進印刷株式会社
電話 045（843）8544

◇平成23年度実務担当者会報告
「実務者のための問題解決法」

平成23年度実務担当者会は、11月25日（金）午後1時30分から横浜国立大学附属図書館中央図書館メディアホールにおいて開催されました。参加者は23館26名でした。

本年度の実務担当者会は、昨年度と同じ「実務者のための問題解決法」というテーマで、加盟館で抱えている問題についてグループ単位でディスカッションを行うことにより、問題を分析し、解決策を考える能力を養う「参加者ディスカッション」と、加盟館における様々な取り組みの実践事例を発表してもらい、情報を共有することにより、現場での問題解決等の手掛かりとする「各種取り組みの実践事例発表」の二部構成で実施されました。

ディスカッションの課題選択については、6月に実施した加盟館調査時に、実際に各館で問題となっていることのアンケートを取り、10 月の申込の際にそれらの問題の中から複数の参加希望があったものをディスカッションの課題として設定することとしました。課題募集時には、「防災」、「読書指導」等、全部で15件のテーマが集まりましたが、最終的には、「教員との連携」、「資料の収集方針」、「展示・イベント等の企画」、「入館者数・貸出冊数の減少」、「ラーニング・コモンズ」、「利用者の問題行動」の計 6 つの課題の下に、4～5 人からなるグループに分かれてディスカッションをしてもらうこととなりました。

また、加盟館における各種取り組みの実践事例については、同じく6月の加盟館調査時に、実践中の取り組み（イベント、サービス等）について調査票に自由に記述してもらい、その中から、実務担当者会での発表を快くお引き受けくださった、慶應義塾大学理工学メディアセンター様と湘南工科大学附属図書館様に、次のとおり、ご発表いただくこととなりました。

①「学生スタッフ S-Circle（エスサークル）の活動」　慶應義塾大学理工学メディアセンター

②「Moodle を利用した図書館ガイダンスの試み」　湘南工科大学附属図書館

（※各発表の配布資料は、協議会ホームページの「実務担当者会資料（開催通知等）」（会員館専用ページ）で公開しています。）

当日は、課題別のグループに分かれての自己紹介の後、参加者ディスカッション（90分）、休憩を挟んで、各種取り組みの実践事例発表（60分）、という流れで研修を行ってもらいました。なお、閉会後、希望者を対象に横浜国立大学中央図書館の見学会が行われました。

参加者の皆様には、お忙しい業務の合間に当実務担当者会にご参加いただき、まことにありがとうございました。

「参加者ディスカッション」については、後日、皆様に各グループの討議内容をまとめていただきましたので、以下に掲載いたします。

◆　教員との連携

教員の図書館活動への関心を高め、連携を図るにはどうすべきか、というテーマ趣旨が提示された。教員の図書館利用状況は、指導する学生の利用行動に反映される面もあり、連携の重要性は認識しているものの課題が多い。選書・利用者教育を中心とする連携の状況を確認し、教員とのコミュニケーションの機会を増やし連携に繋げるにはどうすべきかを議論した。

１．選書

参加４館中、３館は選書カタログの回覧などで予め教員の推薦を募った上で、教員と図書館員が参加する会議体で選定、残り１館は既定の選書方針に基づいて図書館員が選定している。どの館も教員の推薦・購入希望は受けており、自然科学系など図書館員には難しい分野の選書に特に効果を上げている。多くの教員から広く推薦を受けている館ほど、各分野の資料を比較的バランス良く購入できているようである。新規のデータベースや電子ジャーナル等については、何らかの形で教員の意見を踏まえ導入可否を決定するケースが殆どである。

一方、シラバス掲載の指定資料は予め揃えられても、日々の授業で紹介される資料の情報は得にくい。課題に必要だからと突然特定資料の利用が殺到したり、急な購入希望が出たりと対応に追われる場面も報告され、学生の図書館利用のよい機会を活かせていないと感じている。

２．利用者教育

図書館の使い方、資料の探し方、特定データベースの使い方などの利用者教育を教員と連携して行っているケースとしては、①教員から依頼の都度、特定の授業に出て行うケース、②教員が予め図書館と調整の上、授業で教員自ら行うケース、③新入生の必修授業として授業に組み込まれているケースがある。但し③以外は依頼する教員が例年固定化する傾向にある。

３．その他の取り組み

今のところ過去の一時的な事例に留まるが、インタビュー法の授業に図書館員が参加し、題材として図書館を取り上げてもらい自らもインタビューを実践した事例、教員に展示図書の推薦を依頼した事例も紹介された。

４．コミュニケーション機会の確保

連携が不十分である根本原因として、手続のオンライン化や電子資料の普及に伴って教員の図書館来訪機会が減り、一部のコアユーザーを除く教員とのコミュニケーション機会が減少したことが挙げられる。ホームページや掲示といった多数向けの情報発信に頼り過ぎず、文献複写の受け取りやセミナーの申込など何らかのアクションがあった教員とは積極的に個別連絡を取り、日頃から意見交換できる関係づくりに努めたい。新任教員を対象とする図書館ガイダンスは特に重要な機会と考えられる。

現在、教員と図書館員が協働する会議体としては、予算や事業計画など図書館運営について審議するものの他、選書を目的とするものは多くの館で設けている。但し選書以外でより具体的な活動全般を検討する会議体を設けていたのは４館中１館のみであった。教員が集まる機会に図書館サービスを積極的にアピールし、教員のサービス活用を促すことで信頼関係を築く足掛かりとしたい。教員にもメリットのある提案は効果的との報告もあった。

５．事務系部門との連携

教員との接点が比較的多いと思われる教務等の事務系部門と、図書館との接点も少ないこ

とは４館とも共通している。これも教員の場合と同様、事務系職員にとってのメリット（例えば、学内の就職活動セミナーに協力し、企業研究に有用なデータベースを紹介することで就職率アップに貢献する）を模索したい。

６．まとめ

以上のような細かい積み重ねから、教員同士のネットワークや、図書館長・学部長などを介した教員組織への働きかけに繋げて、図書館による利用者教育プログラムの多様化・高度化、授業への組み込み促進、さらには図書館利用が卒業の必須項目となるようなカリキュラム作りなどの本格的な連携に発展させていきたい。教員・事務系職員・学生・図書館員との間の日々の連携を基盤により良いサービスを目指したい。

石川みどり（防衛大学校）、鈴木有紀（慶應義塾大学）、長谷川純子（湘南工科大学）、小林美香（横浜創英短期大学）

◆　資料の収集方針

大学図書館における資料の収集方針は、その大学の研究・教育理念を表すものであり、学生の教育、教養の深化の支援のため、及び専門的な研究を支援するために蔵書を構築するための指針である。

「資料の収集方針」チームでは、そのような収集方針により大学図書館の選書はどうあるべきか、教科書の整備などの実務的な内容から、資料収集の理念に至るまで多岐にわたる意見交換となった。特に事前に配布されたディスカッションテーマの趣旨に質問として記載のあった「消耗品費における選書」について活発な議論となった。ただ事前にこの質問をされた方が今回参加されていなかったことで質問の真意を確認できなかったことが残念であった。

ここでは、（Ⅰ）消耗品費での図書購入について、（Ⅱ）学生選書ツアーの実施状況とその課題、（Ⅲ）総括として、大学図書館としての収集方針や選書の在り方などを含めて、意見をまとめた。

Ⅰ．消耗品費での図書選書、購入について

まず消耗品費（ここでは資産化を前提としない予算を指す）での図書選書、購入に関して、（1）実施の有無と購入対象（2）目的（3）選書・除籍等の基準についての情報交換を行った。

（1）については、消耗品費として選書している大学と消耗品費の予算枠として選書をするのではなく内容によって資産か非資産に仕分けている大学があった。また購入対象も、学生希望図書や就職・資格対策本、教養本、旅行ガイドなど内容の鮮度が資料価値に影響を及ぼすものなど様々なものがあった。

（2）の目的については、資産登録まで時間がかかることで情報が古くなり利用者への提供を急ぐ場合、学生の読書促進のため、また新聞書評欄の中から、学生の教養を補うような図書を明確な選書基準によって厳選し、毎週購入するという意欲的な試みを実施している大学もあった。

（3）については、消耗品費における上記事例のような明確な選書規程や除籍基準を設けている大学から具体的な基準が無い大学まで差があった。

総じて消耗品費での購入図書は、基幹となる選書基準を補う、学生の教養育成やニーズに対

応するものであり、例えば高校から大学へのギャップを埋める目的で選書枠を設けている事例報告があった。

Ⅱ．学生選書ツアーについて

Ⅰで述べた消耗品費での図書購入目的として挙がった“学生からの要望に応える”“読書の促進”等の、一つの試みとして近年多数の大学で実施されている選書ツアー（学生選書）にも議論が及んだ。

選書ツアーについては、これまでも多くの意見がある通り、各大学の実施の有無も含め、賛否両論があった。学生の希望する資料の把握や、利用促進としてのイベント効果が期待できる等の意見がある一方、読み物など軽いものばかりとなり大学図書館の選書としてはふさわしくない、学生の学費を預かるものとして資料収集方針、選書基準のもと図書館員の責任ある選書が必要等、大学図書館員の義務と責任についての言及もあった。実施した大学からは、「予想より読み物ばかりの選書ではなかった。大学院生や教員の参加により、専門性の高い選書がなされ利用促進にも繋がっている。」との報告もあり、一つの取り組みとして一定の効果を上げていると評価する大学もあった。ただ、実施するにあたって、参加者(学生)の選書要望を寛容に受け入れることは収集方針に影響を与えることがあるので、明確な選書条件を設け、参加者（学生）の意思を最大限に尊重しつつ、収集方針から大幅に逸脱しない選書や蔵書構築をすることが重要と考える。

Ⅲ．総括にかえて

高等教育を担う大学図書館は、各大学の研究や教育方針をもとに長期的展望に立って、資料を広く体系的に収集しなければならない。それには、確たる理念と厳格な選書基準が必要と思われる。しかし、利用者の要望を組み入れ積極的に利用される図書館である必要性は疑うべくもなく、また学生の読書離れ活字離れが指摘される中、これまでの選書方針だけではなくリメディアル教育も含め、学生の教養を育み、また専門的な研究の橋渡しとなるような図書も収集していく必要があるということは間違いない。

このように資産化する図書だけでなく、消耗品費による図書の購入についても、その特性を生かしながらも目的を明確にし、図書館全体の収集方針の中で捕らえる必要性があると思われる。

また、ここ近年で急速に発展した電子図書などの受入についても検討する時期にきており、そうした新たなメディアや環境、学生の資質や要求にも収集方針に沿いながらも柔軟に対応していくことも重要であるということで意見が一致した。

渡邉怜（神奈川工科大学）、中村智子（湘南工科大学）、秋山美佐子（明治学院大学）、酒井明子（上智短期大学）

◆　展示・イベント等の企画

図書館広報を目的とした展示・イベントの企画について、各館における事例を紹介し合い、その効果や問題点について意見交換を行った。以下に、各館が報告した事例と、ディスカッションを通じて感じた各館の課題や今後の展望を紹介する。

【神奈川大学図書館】

貴重書や流行語大賞関連などさまざまな所蔵資料を、テーマを設定して展示、また、年に一回担当部署との連携で大学の歴史資料を展示している。イベントとしては館内のホールで映画の上映会や講演会を開催し、学生だけでなく一般利用者、近隣の方々にも公開している。また、今年度は初めて学生の選書ツアーを行った。今後は、多彩な事例を参考に、新たな企画を検討していきたい。

【慶應義塾大学日吉メディアセンター】

塾生や教員のオススメ本を紹介する読書推進展示や、設定したテーマに関連する資料を紹介する企画展示を実施。また、学生の勉強相談にのる「学習相談員」によるレポート展示、読書マラソンコメント大賞（大学生協主催）受賞作品展示など、イベントと連動した展示もおこなった。他にも、新入生を対象としたオリエンテーリングや選書ツアーもおこなった。学部1・2年生が利用の中心となるので、学生が大学図書館に慣れ親しむことができる企画を今後も実現していきたい。

【湘北短期大学図書館】

学生選書ツアーを年2回実施。「学生のオススメ本コーナー」に選んだ本を展示し、ポップで紹介している。他にも、図書館キャラクターによるテーマ展示「さるーちのオススメコーナー」、学生生活に役立つ軽図書の展示「ライフスタイルコーナー」、映画化されて話題になった小説を集めた「映画の原作本コーナー」を設置。また、本の帯を掲示し、新着図書を紹介している。引き続き、読書嫌いの学生にも興味を持ってもらえるような展示・イベントを企画・実施していきたい。

【横浜創英短期大学図書館】

前任校での事例として、「図書館広報誌」「教職員による書評ブログ」「読書感想文コンクール」等の取組みを紹介した。より多くの参加者を確保し図書館の活性化を図るには、イベントの実施だけで満足するのではなく、図書館広報の拡充が必須だと言えるだろう。

本学に於いても2012年4月の横浜創英大学開学を契機に革新的なイベント・企画を多数実現し、「大学選びの決め手と成り得る図書館」を創造したい。

【横浜美術大学図書館】

本学では展覧会の図録を積極的に収集しており、開催中の展覧会図録および関連美術家の作品集などを展示し、展覧会での生の作品鑑賞を推奨している。また、本学教員および卒業生が手掛けた作品・関連図書（表紙イラスト、コラージュ、作品集、装丁、著書）も図書館や大学ギャラリーなどで紹介している。今後は、更に美術大学の特色を活かした企画を考えていきたい。

以上、さまざまな事例に触れることにより、有意義な時間を持つことができた。今後、各館において展示・イベントを企画するうえで、今回のディスカッションを参考にしたい。

堀江美由紀（神奈川大学）、杉真梨子（慶應義塾大学）、松村さゆり（横浜美術大学）、高橋可奈子（湘北短期大学）、桝田淳介（横浜創英短期大学）

◆　入館者数・貸出冊数の減少

入館者数と貸出冊数には相関関係があるため、両者を区別することなくディスカッションをすすめ、まずそれぞれの図書館の実情を話すことから始めた。

１．現状

同グループとなった 4 館ともに入館者や、貸出冊数の減少が見られる。

今年度は震災と計画停電の影響もあり、閉館や開館時間を短縮した図書館も多く、入館者数や貸出冊数はどの館も明らかに減少している。今年度に関してはある程度理由がつく現象だが、昨年度の統計を見ても過去と比較して貸出冊数は 7%から 30%近く減少している。

・ 館内の入口近くに自習用のパソコンを用意しており、その利用は多いが、パソコンが満席だと帰ってしまうため、入館者数や貸出冊数の増加に結び付いていない。
・ 館内は無線 LAN となっており、勉強場所としても使用できる環境でプリンターも自由に使えるようになっているが、入館者数は減っている。

などの報告があった。また特に教員の利用数が少ないという意見がある一方、3 年生を中心とした就活情報の講座への参加や、グループ学習室などの利用は多い。ラーニングコモンズの可能性も含めて、パソコンを使った自習場所として図書館を利用する学生が多くなっているように思える。

減少要因の一つとして資料費の削減があり、映写会等で利用する新しい DVD の受け入れが減ったことも考えられるという意見もあった。また委託を入れてから利用者が減った気がするという発言もあった。

２．工夫点

どの図書館も利用数の増加を図って、いろいろな工夫を行なっている。例えば

・ 実際に本が手に取れるような展示を行なう。
・ 映画の原作本や小説を選書する。
・ 貸出のときに渡しているレシートを 10 枚集めるとファッション雑誌の付録をプレゼントする。
・ 読書ラリーとして面白い本を推薦するチラシを置いたり、ブクログを使って新着本紹介を行なう。
・ 本のしおりの裏に横浜の植物のメッセージをいれて配布する。

オリエンテーションや、ゼミの講習会などで図書館の使い方やデータベースの説明などはどの館でも共通して行なっている。

３．話し合いの中で見えてきたポイント

・教員との連携

教員から課題等が出ると学生はすぐに反応する。できるだけ教員から課題図書や、推薦を出してもらうようにすると効果がある。図書館長との関係には図書館によって温度差があり、普段から親密にコミュニケーションをとっていたり、館長自身が先頭に立って企画に参加しているところから、忙しすぎて話す機会も少ない、などさまざまだが、教員とのパイプ役としてもっと有効に利用することも考えられる。個人的に教員に積極的に声をかけるなど、日頃からコミュニケーションをとることも今後につながるのではないかという意見もあった。

・選書について

教員からの購入申し込みが少ないので、結局ほとんど図書館で選書しているという図書館が多い。今までは小説などはあまり入れなかったが、希望があれば漫画以外は購入していると

いう館もあった。学生の興味を引き出すような選書を工夫する必要があるのかもしれない。

選書ツアーを計画しても学生の応募はあまりないという報告があったが、これは関心がないというより、授業が詰まっていて余裕がないということもあるようだ。声をかけると協力してくれる学生がいるので、個人的コミュニケーションをとってコアとなる学生を確保することも大切ではないか。

なかなか結論が出るテーマではないが、他館のさまざまな事例は大変参考になり、地道な取り組みを積み上げることが結果に結びつくのではないかと思われた。

根本正巳（産業能率大学）、鷺谷由美（東洋英和女学院大学）、池田有紀（横浜商科大学）、原真由美（横浜女子短期大学）

◆　ラーニング・コモンズ

先ず、すでにラーニング・コモンズを開設している図書館は現状について、開設していない図書館は検討していることについて、報告してもらいました。

開設している図書館はいずれも始まったばかりとのことでしたが、その状況については、規模においても開設費用の調達についても進展事情についても様々でした。一方、開設していない図書館においてはヘルプデスク（学習支援）の設置が検討されているという報告がありました。

ラーニング・コモンズのこれからの課題についても各図書館様々であり、設備面の充実を主な課題とする館もあれば、サービスの充実を主な課題とする図書館もありました。ただ、人の配置に関する課題については注目が集まりました。

ラーニング・コモンズにおいてよく行われている人的サービスとして、ライティング・サポート（論文・レポート作成支援）やラーニング・サポート（学習支援）などがありますが、これを実施するには、図書館職員だけでは限界があります。文献の検索・収集を支援すること、レポート・論文の書き方や学習・研究方法に関する資料を紹介することはできても、特定分野の学習・研究の中身について、学内の学部・学科にあまねく対応してアドバイスをする事は極めて困難です。

ラーニング・コモンズ開設よりも先行して学習アドバイザーの設置をしているメンバー館の事例を聞くとともに、その他知りうる事例・情報を出し合い、人の配置について意見交換をしました。列挙しますと以下の通りになります。

- 図書館職員とは別に、大学院生を学習アドバイザーやサポートスタッフとして配置する事例がいくつかの大学図書館で見られる
- 学生には教職員より年齢の近い大学院生の方が相談しやすいようだ
- 各学部・学科や特定分野に対応する大学院生スタッフを揃えるのは難しい
- 大学院生スタッフの実績を少しでもつくることができれば、時間はかかるかもしれないが、他の学部・学科への波及が期待できる
- 最初の実績は協力的で影響力のある教員（身近な例では図書館長など）の所属する学部・学科などがねらい目

・ 学習支援のスタッフは、利用動向を見極めて必要な時間帯を決め、デスクに詰めてもらうのがよい
・ 大学院生スタッフをどのように人選するのか、雇用の管轄はどこがするのか（図書館か？他部署か？）については、難しい問題を内包していることがあり、大学の事情に合わせて工夫が必要

今回は、情報・意見の交換まででタイムアップになり、深く掘り下げてディスカッションするに至りませんでしたが、貴重な機会になりました。

佐藤千秋（関東学院大学）、竹信幾久子（鶴見大学）、橋本智里（フェリス女学院大学）、萩原誠司（文教大学）

◆　利用者の問題行動

１．課題

以下３点について、各館の現状を報告した。

① 延滞
② 飲食
③ マナー

①延滞中は貸出不可としているケースが多いが、罰則に関しては各館さまざまであった。督促方法や頻度は館によって異なるが、文書だけではなく、電話で行い、返却日を約束することや保護者や教員を通して督促するのが効果的。また、卒業後に返却しない場合、どのように対処しているかについても話題となり、一定期間督促しても返却がない場合は督促を打ち切り、除籍している事例が報告された。

②震災後、省エネのために館内の温度が高かったことを受け、ペットボトルやタンブラー等、蓋つきのものであれば持込可とした事例等が報告された。また、持込可能なスペースを限定している館もあった。キャレルやグループ学習室、視聴ブース等、死角になっているスペースでの飲食が目立つ。近年、ネットカフェやブックカフェ等、本があるところで飲食可となっている場所も多くなり、図書館では飲食ができないという感覚が希薄になっている印象を受ける。

③おしゃべり、寝ている利用者について。話せるスペースが確保されている館については、移動するよう注意。寝ている学生への対処は館によって異なるが、いずれにしても他の利用者に迷惑になっている場合は起こしている。

２．解決策

①延滞

罰則を設けることや、保護者・教員に協力を仰ぐ

罰則を設けるだけでなく、守っている利用者に特典を与えるというのもひとつの方法

②飲食

ペットボトルのみ許可すること等で、一律禁止にするよりモラルが保たれる

③マナー

話ができるスペースを確保することで折り合いをつける

休憩等本来の目的外の利用者に対しては他の利用者に迷惑が掛かっていなければ譲歩する

３．まとめ

どのようなケースであっても、状況に応じて

対応することが大切であるという結論に至った。各図書館の事情により、多少状況は異なるが、他館の取り組みを参考にすると解決の糸口が見える。今後も情報交換を大事にしたい。

酒井誠（神奈川工科大学）、古越奈央（相模女子大学）、鈴木理香子（桐蔭横浜大学）、渡邉利栄子（東海大学）

「各種取り組みの実践事例発表」では、慶應義塾大学理工学メディアセンター様と湘南工科大学附属図書館様でそれぞれ実践中の、興味深い事例をご紹介いただきました。

◆　学生スタッフ S-Circle（エスサークル）の活動

慶應義塾創設150周年記念未来先導基金2010年度採択プログラム「学生スタッフによる図書館における新しいコミュニケーションの場の創生」により実施されている活動で、図書館の一角に相談コーナーを設け、修士課程の学生を中心とした学生スタッフが下級生の学習や学生生活上の相談を受付けたり、学生スタッフが企画したイベントや展示を図書館内で行ったりする活動に取り組んでいるそうです。当日は、慶應義塾大学理工学メディアセンターの向當麻衣子様にご発表いただきました。

◆　Moodleを利用した図書館ガイダンスの試み

オープンソースのe-learningソフトウェアであるMoodleを用いた図書館ガイダンス（修学基礎のガイダンスのみならず、大学院生・卒業研究/演習生のガイダンスにも利用とのこと）の本年度の試行について、Moodle導入の背景から始めて今後の展望と課題まで、インターネットに接続して実際の画面を見せていただきながら、湘南工科大学附属図書館の中村智子様と長谷川純子様にご発表いただきました。

【事務局報告】

◎ 平成 23 年度連絡会

第 1 回　5 月 20 日（金）11:00-12:00

第 2 回　11 月 25 日（金）11:00-12:00

横浜国立大学にて開催いたしました。議事録は、メーリングリストにより会員館に送付済です。また、第 3 回については、連絡館用メーリングリストにより打合せを行う予定です。

◎ 電子学術書利用実験プロジェクト・シンポジウムの開催について

慶應義塾大学理工学メディアセンター様より、当協議会に次のとおり、本年度の総会でご発表いただいた電子学術書利用実験プロジェクトに関するシンポジウム開催の案内がありました。なお、詳細については、全会員館用メーリングリストにて別途お知らせしております。

日　程　　平成 24 年 3 月 12 日（月）
場　所　　慶應義塾大学三田キャンパス東館 6 階
主　催　　慶應義塾大学メディアセンター（共催：大学出版部協会）
プログラム　プロジェクト全体の説明
　　各担当者（出版社、協力企業、大学図書館）による実験成果の報告
　　出版社と学生モニターの対話
　　ディスカッション「大学図書館改革と電子書籍」

◎ 横浜市内大学図書館コンソーシアム平成 23 年度第 1 回研修会の開催について

横浜市内大学図書館コンソーシアム様より、当協議会に次のとおり、同コンソーシアムの平成 23 年度第 1 回研修会開催の案内がありました。なお、詳細については、全会員館用メーリングリストにて別途お知らせしております。

日　程　　平成 24 年 3 月 15 日（木）
場　所　　鶴見大学図書館　地下 1 階ホール
テーマ　　図書館連携におけるコンソーシアムの役割
　　（講師　大学図書館コンソーシアム連合：JUSTICE　柴田育子氏）

◎ 神奈川県内大学図書館相互協力協議会

ホームページ　http://www.kulc.net/
メーリングリスト
　全会員館用：kulc@kulc.net
　連絡館用　：kulc-r@kulc.net

※　登録アドレス、名簿記載事項に変更がありましたら、事務局までご連絡ください。
　事務局：kulc-office@kulc.net